

中国語話者のための 日本語教育研究

中国語話者のための日本語教育研究会編

第 5 号

日中言語文化出版社

目次 CONTENTS

研究論文

Research articles

第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察
小森和子・玉岡賀津雄・斉藤信浩・宮岡弥生 1

Acquisition of Japanese kanji compound words by Chinese native speakers learning Japanese as a second language

KOMORI, Kazuko, TAMAOKA, Katsuo, SAITO, Nobuhiro, MIYAOKA, Yayoi

中国語話者による中日同形漢語語彙の習得を考えるための対照研究

張 麟声 17

A contrastive study for the purpose of investigating Chinese speakers' acquisition of homographic Sino-Japanese vocabulary

ZHANG, Linsheng

「はらはら」は「元気な様子」？

—中国語を母語とする学習者を対象としたオノマトペと静止画のマッチング実験の結果から—
中石ゆうこ・坂本沙織・酒井弘 31

Does "hara-hara" mean "cheerful"? :Onomatopoeic word-picture matching experiment by Chinese Learners of Japanese

NAKAISHI, Yuko, SAKAMOTO, Saori, SAKAI, Hiromu

話題転換ストラテジーの使用傾向から見る話題転換方法の日中比較

田中奈緒美・崔 沫舒 47

A Comparative Study on the ways of Topic Shifting between Japanese and Chinese from the Angle of Topic Shifting Strategies

TANAKA, Naomi, 読み方

日本語の「V1-慣れる」と中国語の“V1-惯”の対照研究

杉村 泰 62

Research on Japanese Compound Verb “V1-*nareru*” and Chinese Compound Verb “V1-*guan*”

SUGIMURA, Yasushi

授業に必要な中国語の豆知識

Useful information about the Chinese language

第5回 程度補語

Paper 5 Degree complement

TATEISHI, Hajime

建石 始 73

日中異文化間コミュニケーション

Japan-China intercultural communication

本当にあった怖い話 一留学生の悩み

Scariest True Story : Trouble of Foreign Students

SHIOIRI, Sumi

塩入すみ 80

研究会の規約

Regulations of the study group

90

研究会の組織

Management of the study group

93

研究発表応募規定

Notes for contributors

94

会誌投稿規定

Notes for contributors

95

大会委員会からの便り

Notes from the study group meeting committee

97

編集後記

Postscript

ZHANG, Linsheng

張 麟声 99

第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の 日本語の漢字語の習得に関する考察

小森 和子 (明治大学)・玉岡 賀津雄 (名古屋大学大学院)・

齊藤 信浩 (九州大学)・宮岡 弥生 (広島経済大学)

要 旨

中国語を母語とする日本語学習者の日本語の漢字語の習得に及ぼす母語の影響を検討するために、238名に漢字語テストと語彙総合テストを実施した。漢字語テストでは、日中同形語と和製漢語を出題し、日本語としての漢字語に関する知識を測った。語彙総合テストでは、和語、外来語、複合辞等の日本語の全般的な語彙知識を測定した。その結果、語彙総合テストの得点が高くなると、日中同形語の日本語独自義、および和製漢語の正答率も高くなった。しかし、中国語独自義を日本語に転移する誤りは、語彙総合テストの得点の高い上位群にも多く認められた。日本語独自義は肯定証拠として繰り返しインプットがあり、徐々に習得される一方で、中国語独自義が日本語では使用されないというのは否定証拠でなかなか気づきにくく、中国語独自義の過剰な転移を抑制するのは容易でないということが再確認された。

キーワード：日中同形語、漢語、中国語独自義、日本語独自義、語彙知識

1 はじめに

日本語の漢語は中国語との関係から、S語、D語、O語、N語の4つに分類される(文化庁, 1978)。S語は日本語と中国語の両言語で意味がほぼ同じ(Same)だと考えられる同形同義語であり、O語は両言語で意味の一部は重なっているが(Overlapping)、一部は異なっている同形類義語、D語は両言語で意味が全く異なる(Different)同形異義語である。S語、O語、D語は、あわせて、同形語と呼ばれる。一方、N語は日本語にしかない語(Nothing語)である。漢語全体に占める割合は、S語が最も多く、全体の約3分の

2、O語とD語は併せて10分の1未満、N語は約4分の1である（文化庁、1978）。すなわち、日本語の漢語のうち、約4分の3は同形語である。また、漢語は日本語の語彙に占める割合が高く、書き言葉では50%以上を占めると言われている（西尾、2002）。こうした事情を鑑みると、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）は、他の言語を母語とする日本語学習者に比べて、第二言語としての日本語の語彙習得に有利だと言えるであろう。

しかし、O語やD語は、日本語と中国語とでは、意味範囲、文法的振る舞い、共起語等にズレがある。また、N語は中国語には存在しない。そのため、中国人学習者であっても、日本語の語彙として学ばなければならない漢語もある。例えば、「単位」というO語には、「卒業までに130単位をとらなければならない」のように、＜大学等における履修計算の基準＞という意味があるが、これは日本語独自の意味（以下、日本語独自義）であるため、新たに覚えなければならない。また、中国語の『単位』（中国語には『 』を付す）は、＜所属する職場、部署＞という意味でも用いられるが、これは中国語独自の意味（以下、中国語独自義）であるため、この意味が日本語の「単位」にはないということも、学ぶ必要がある。一方、N語の場合、例えば、「給」と「料」が組み合わせられた「給料」という語が日本語には存在し、その意味は中国語の『薪水』に相当する、という知識を得なければならない。つまり、中国人学習者が日本語の漢語を正しく習得しているか否かを検討するには、同形語の日本語独自義が正しく習得されているか、中国語独自義が日本語では使われないことを理解しているか、また、N語については、どのような漢字の組み合わせによる語が日本語には存在し、その語の意味は何であるかを習得しているか等、様々な観点からの検討が必要である。

また、一般的に、漢語の知識は語彙知識の一部と見なされるが、中国人学習者の場合、日本語の漢語習得に母語の影響が予想され、和語や外来語を含む全般的な語彙知識とは異なる習得過程を経る可能性が推測される。よって、総合的な語彙知識の増加に伴って、N語、O語、D語の習得がどのように変化するか、分析する必要がある。

そこで、本研究では、中国人学習者を対象に、総合的な語彙知識を測るテ

ストと、N語、O語、D語の知識を測るテストを実施し、総合的語彙知識の変化と、(1) N語の習得、(2) 同形語（O語・D語）の日本語独自義の習得、および(3) 同形語（O語・D語）の中国語独自義の日本語への転移、との関係について検討する。

なお、漢語とは、音読みの漢字熟語を指すのが一般的であり、「手紙」のような訓読みの漢字熟語や、「派手」、「場所」といった重箱読みや湯桶読みの混種語は、漢語に含めないことがある。しかし、「手紙」や「場所」のように、中国語にも同じ形式が存在する語は、同形語として扱われることも少なくない。また、「派手」のような混種語は、漢語ではないものの、漢字熟語であることから、N語として扱うこともある。そこで、本研究も、語種や音訓に関わらず、漢字で表記された語を“漢字語”と呼び、日本語にも中国語にも存在する漢字語を“同形語（S語、O語、D語）”、日本語にしか存在しない漢字語を“N語”と定義し、論を進めることとする。

2 先行研究

陳（2003）は、台湾で日本語を学ぶ学習者を対象に、S語、D語、O語、N語の、4つのタイプの漢語の習得を検討した。調査の方法は、4つのタイプの語を単体で提示し、その意味を最も適切に表している中国語訳（繁体字）を1つ選ぶという方法である。例えば、「地味」というD語については、①『故郷的味道』、②『地方的小吃』、③『樸素』、④『特色』のような中国語訳の選択肢を提示し、中国語義である①の選択肢が選ばれていないか、また、日本語独自義の③が正しく選ばれているか、分析した。その結果、O語やD語では、中国語義を選択する比率が高く、日本語独自義があまり習得されていないことが分かった。一方、N語は語によるばらつきはあるものの、全体的に正答率が高く、習得が進んでいることが示された。この結果から、N語は比較的習得しやすいこと、また、中国語独自義は日本語に転移されやすいことが示唆された。ただし、陳（2003）では、日本語独自義の習得と中国語義の転移を別々に測っていないため、例えば、正答の③『樸素』を選んだ学習者が、①『故郷的味道』は中国語独自義で、日本語には存在しない意味だということも理解していたか否かは、明らかでない。

加藤（2005）では、S語、O語、D語、N語の4つのタイプを含む文の正誤判断テストを作成し、豪州に住む中国人学習者がこれらの4つのタイプをどの程度正しく習得しているかを分析した。加藤（2005）では、O語、D語の日本語独自義、あるいは、N語が習得されているか否かを見るために正用文を作成し、また、O語やD語の中国語独自義が日本語に転移していないかを測るために誤用文を作成した。この誤用文を調査に加えることによって、陳（2003）で明らかにできなかった中国語独自義の転移の有無を検討することが可能になる。例えば、正用文としては「日曜日は友達と約束があるので、カラオケに行けません」を提示し、誤用文としては「*昨日、テレビで新聞を見ました」を提示した。分析の結果、正用文については、日本語習熟度に比例して、N語やD語の正答率は上がっており、日本語独自義の習得が進んでいることが確認された。一方、誤用文についても、日本語習熟度が高くなるにつれて、徐々に正答率が上がっており、中国語独自義の転移が減少傾向にあることが確認されたが、O語の中には、日本語習熟度の上位群でも、誤用文を正用文だと誤った判断をする場合もあった。このように、加藤（2005）では、誤用文を提示することにより、中国語独自義の転移について検討することができた。しかし、調査対象語が各タイプ4語ずつで数が少ないため、結果を一般化することが難しい。また、正誤判断課題はチャンスレベルが50%と高く、習得を測るテストとして妥当か否か、検討を要する。

さらに、安（2000）では、韓国語にも中国語由来の語が多くあることから、日本語、中国語、韓国語の3つの言語の漢語の異同を分類し、中国で日本語を学ぶ中国人学習者と韓国で日本語を学ぶ韓国語学習者を対象に調査を行い、S語とN語の習得を検討した。調査の方法は、文意に合う語を選ぶ多肢選択式で、選択肢は、a. 正答、b. 中国語や韓国語で使われている漢語、c. 意味的に関連のある漢字を用いた非単語、の3つであった。例えば、「私はアメリカ（a. 映画 b. 電影 c. 画影）が好きです」という形式である。調査の結果、中国人学習者は全体的に正答率が高く、また、bのような中国語を選ぶ比率もあまり高くはなかった。そのため、必ずしも中国語の転移による誤用が多いとは言えないと述べられている。しかし、このような、日本語に存在する語とそうでない語を混在させる形式では、意味を知っているか否かで

はなく、日本語にこのような語が存在するか否かによって解答する可能性が否定できない。また、安（2000）では、O語やD語は対象語に含まれていないため、同形語の中国語独自義が日本語に転移しているか否か等、意味の習得や転移については不明である。

3 研究課題

先行研究によって示された知見と残された課題を踏まえ、本研究では、中国人学習者は、総合的な語彙知識が増えると、(1) N語の知識も増えるのか、(2) 同形語（O語・D語）の日本語独自義の知識も増えるのか、(3) 同形語（O語・D語）の中国語独自義の日本語への転移は減少するのか、それとも、語彙知識が増えても中国語独自義の日本語への転移は減少しにくいのか、について検討する。なお、(2)と(3)については、O語のみ、あるいは、D語のみで調査用テストを作成することを試みたが、いずれかだけで十分な数の語を集めることが難しかったため、今回はO語とD語を混ぜて、調査することとする。

4 調査の概要

4.1 調査対象者

本研究の調査対象者は、中国の大学で日本語を専攻している学部生で、1年次（初級）修了者87名、および2年次（中級）修了者151名の合計238名（男性33名、女性204名、無記名1名）である。調査実施時における対象者の年齢は平均20歳8か月（標準偏差は1歳0か月）であった。

4.2 手続き

本研究では、総合的な語彙知識を測定するための語彙のテスト（以下、語彙総合テスト）を行った後、N語やO語・D語の知識を測定するためのテスト（以下、漢字語テスト）を行った。

4.3 テスト

4.3.1 語彙総合テスト

語彙総合テストには、宮岡・玉岡・酒井（2011）の語彙テスト（全48問）を用いた。このテストは、実験や調査の際に調査対象者を日本語能力によって弁別する指標とするべく開発されたものである。

出題対象語は、名詞、形容詞、動詞が各12問、それに複合辞（「～にわたって」「～だけあって」等）12問を加えた計48問である。また、名詞、形容詞、動詞の36問は、語種のバランスも考慮し、和語、漢語、外来語が12語ずつ選定されている。さらに、複合辞を含めた48問は、(旧)日本語能力試験の出題基準級（語彙級、文法級）が1級24問、2級24問である。

出題形式は、4つの選択肢から1つ選ぶ多肢選択の空所補充形式である。例えば、「彼のスピーチは、結婚式に（ ）内容の、いいスピーチだった」という空所のある設問文に対して、「おびたしい」「ふさわしい」「おとなしい」「まぎらわしい」の中から1つを選ぶという形式である。

なお、宮岡他（2011）が中国で行った調査（N=281）では、テストの信頼性係数（クロンバックの a 係数）は $a=.737$ であった。また、項目の困難度（全員が不正解なら0、全員が正解なら1となる）は0.085～0.986（平均0.468、標準偏差0.252）で、易しい項目から難しい項目まで幅広く含まれており、学習者を語彙知識の高い者と低い者とに弁別するのに有用なテストであると判断した。

4.3.2 漢字語テスト

漢字語テストは本研究のために新たに作成した。研究課題に示したように、本研究は、①N語の習得、②同形語（O語・D語）の日本語独自義の習得、および、③中国語独自義の日本語への転移、を観察する。そこで、①についてはN語テスト（1）、②についてはO語・D語テスト、③についてはN語テスト（2）、と、それぞれの目的に即して、3種類のテスト（各15問）を作成した。なお、O語・D語テストのうち、O語は10問、D語は5問である。

4.3.2.1 出題語の選定

テストの詳細は次節で述べるが、本節では、テストに出題した語について解説する。出題語の選定（表1）は、文化庁（1978）、王・小玉・許（2007）等を参照しながら、中国語母語話者の協力も得て、以下のように行った。

表1 3種類の漢字語テストの出題語

N語(1)	暗記	改札	感心	看板	帰宅	寄付	苦勞	財布	司会	持参	下心	素人	相続	内緒	無事
N語(2)	育成	意味	意欲	我慢	計画	脱退	丁寧	転職	入力	配達	配分	人柄	返事	本場	油断
O語・D語	回転	看病	貴重	求人	嚴重	差別	出産	処分	真剣	単位	調子	提出	反対	不自由	流出

注：O語・D語のうち、O語は10語、D語は5語である。+が付いている語がD語である。

まず、N語テスト（1）は、出題語はN語だが、その中国語相当語が中国語に固有の語で、日本語にはない語である。例えば、日本語の「財布」の場合、中国語の相当語は『钱包』で、これは中国語の固有語である。日本語字体に直した「*钱包」という語は日本語には存在しない。

次に、N語テスト（2）も、出題語はN語だが、その中国語相当語が日本語にもある同形語（O語とD語）である。例えば、日本語の「入力」には、<文字や数値等の情報をコンピュータに入れる>という意味があるが、この意味に相当する中国語は『輸入』である。しかし、この『輸入』は中国語だけでなく、日本語でも使われる。ただし、日本語の「輸入」は、<外国の産物・技術を自国に取り入れる>という意味で、中国語のように<文字や数値等の情報をコンピュータに入れる>という意味はない。

つまり、N語テスト（1）とN語テスト（2）の違いは、出題語の中国語相当語が中国語の固有語か、それとも日中間で意味にずれがある同形語か、である。

最後に、O語・D語テストは、出題語は日本語独自義を持つO語（10語）、またはD語（5語）である。例えば、O語の「流出」は日本語にも中国語にも<液体が外部に流れ出る>という共通の意味があるが、日本語には、「顧客名簿が流出する」のように、<人や情報が外部に漏れる>という派生的意味もあり、これは日本語独自義である。

出題語は、(旧)日本語能力試験の出題基準級、親密度、使用頻度が、3種類のテストの間でできるだけ均質になるように選定した。まず、出題基準級は、2級

を中心に選定した。その結果、N語テスト(1)は2級12語、1級1語、級外2語、N語テスト(2)は3級3語、2級6語、1級4語、級外2語、O語・D語テストは3級1語、2級10語、1級3語、級外1語となった。級を順序尺度とみなして(ただし、級外を除く)、中央値を求めたところ、いずれのテストも2級が中央値であった。次に、親密度は、天野・近藤(2003)の指標を用い(1「なじみがない」～7「なじみがある」の7段階評定)、平均(標準偏差)を求めたが、それぞれ、5.936(0.247)、5.917(0.311)、5.961(0.252)であった[$F(2, 44) = 0.098, n.s.$]。さらに、使用頻度は国立国語研究所のBCCWJ全体での100万語当たりの使用頻度率(短単位)の指標を用い、平均(標準偏差)を求めたが、それぞれ、0.020(0.014)、0.051(0.074)、0.041(0.034)であった[$F(2, 44) = 1.543, n.s.$]。以上のように、3種類の出題語は主要な語彙特性が近似していると考えられる。

4.3.2.2 N語テスト(1)

N語テスト(1)は、N語の意味を知っているか否かを測るために作成したテストである。テストの形式は、設問文の中の空所に入る最も適切な語を4つの選択肢の中から一つ選ぶ、多肢選択形式である。

正答以外の誤答選択肢は3つで、①正答に対応する中国語相当語と同じ漢字を含む語(中国語関連)、②設問文の文脈と意味的な関連があると考えられる語(文脈関連)、③設問文と統語的には合致するが、意味的には不適切な語(統語関連)で、いずれも日本語に実在する語である。

例えば、出題語「司会」の場合は、以下のように、誤答選択肢①は、「司会」の中国語相当語が『主持』であることから、「主」の漢字を使う「主役」とした。誤答選択肢②は、パーティーに関連がありそうな「交流」とした。誤答選択肢③は、意味的には不適切な「採点」とした。なお、『主持』を日本語字体にした「*主持」は選択肢には入れなかった。これは、安(2000)の問題点を踏まえ、日本語に実在する語のみで選択肢を構成するためである。

【N語(1)の設問例】

友達の結婚パーティーで()をすることになったが、うまく進行できるか心配だ。

- (1) 司会 (2) 主役 (3) 交流 (4) 採点

4.3.2.3 N語テスト(2)

N語テスト(2)では、N語の意味を知っているか否かを測るだけでなく、中国語の知識を正しく抑制できるか否かも観察する。N語テスト(2)は、正答(出題語)の中国語相当語が同形語なので、その同形語を誤答選択肢①(中国語適合)として入れることによって、もし、この誤答選択肢①が選ばれば、中国語の知識が転移している可能性が示唆される。

例えば、出題語「返事」の場合、以下のように、誤答選択肢①は、「返事」に相当する中国語『回复』が同形語なので、日本語字体で表した「回復」とした。また、誤答選択肢②は文脈に関連のある「通信」、誤答選択肢③は統語的には合致するが、意味的には不適切な「論文」とした。

【N語(2)の設問例】

友達から手紙をもらったから、()を書かなければならない。

- (1) 返事 (2) 回復 (3) 通信 (4) 論文

4.3.2.4 O語・D語テスト

O語・D語テストでは、同形語のO語、あるいはD語の日本語独自義を知っているか否かを観察する。誤答選択肢は、N語テスト(1)と同様で、①中国語関連、②文脈関連、③統語関連、である。

例えば、出題語の「流出」はO語で、中国語の『流出』には、<液体が外部に流れ出す>という意味はあるが、<人や情報等が外部に漏れる>という意味はない。後者の意味は日本語独自義で、これに相当する中国語は『外流』である。そこで、誤答選択肢①として、中国語相当語である『外流』の漢字一字を含む「外出」を選んだ。また、誤答選択肢②としては、意味的に関連しそうな「移転」、誤答選択肢③は「安定」とした。なお、このテストでも、『外流』を日本語字体にした「*外流」は選択肢には含めていない。

【O語・D語の設問例】

銀行の約1万人の顧客名簿が()してしまったようだ。

- (1) 流出 (2) 外出 (3) 移転 (4) 安定

5 結果と考察

5.1 語彙総合テストの結果

語彙総合テストは、1問を1点で採点し（48点満点）、238名の正答数得点を求めたところ、平均は27.34点、標準偏差（SD）は7.50であった。また、信頼性係数は $\alpha = .853$ と高い値が得られた。

この語彙総合テストの得点に基づいて、調査対象者を上位群、中位群、下位群の3つの群に分けた。中位群は平均から $\pm 0.5SD$ の間の得点の者とし、平均 $+0.5SD$ 以上を上位群、平均 $-0.5SD$ 以下を下位群とした（表2）。

表2 各群の語彙総合テストの結果

語彙総合	M	SD	得点範囲	N
上位群	35.38	3.06	32~44	80
中位群	27.85	2.26	24~31	82
下位群	18.34	3.32	8~23	76
全体	27.34	7.50	8~44	238

注：Mは平均，SDは標準偏差，Nは人数を示す。

5.2 漢字語テストの結果と考察

次に、3種類の漢字語テストも1問1点で採点し（45点満点）、238名の正答数得点を求めたところ、平均は32.43点、SDは6.01であった。信頼性係数は $\alpha = .805$ であった。前節で示した語彙総合テストに基づいて群分けした下位群、中位群、上位群の漢字語テストの結果は、表3の通りである。

表3 3種類の漢字語テストの結果

テストの種類	上位群 N=80		中位群 N=82		下位群 N=76		全体 N=238	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
N語(1)	12.59	1.34	10.87	1.71	8.60	1.93	10.78	2.28
N語(2)	11.71	1.59	11.23	1.55	9.29	1.94	10.81	1.95
O語・D語	12.85	1.46	11.46	2.05	7.77	2.58	10.84	2.90

注1：漢語テストの満点はいずれも15点。

注2：Mは平均で，SDは標準偏差を示す。

第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察

これらの3群について3種類の漢字語テストの得点の差を検討するために、語彙総合要因（下位、中位、上位）と漢字語要因（N語（1）、N語（2）、O語・D語）について、 3×3 の反復測定分散分析を行った。なお、前述の通り、3種類のテストの出題語は、出題基準級、親密度、使用頻度等の語彙的特性において統制されており、相互に比較可能だと考える。

分析の結果、語彙総合要因は主効果が有意だったが [$F(2, 235) = 163.216, p < .001$]、漢字語要因は有意でなかった [$F(2, 470) = 0.102, n.s.$]。しかし、交互作用が有意であった [$F(2, 470) = 15.664, p < .001$] ので、単純主効果の検定を行った。

まず、N語（1） [$F(2, 235) = 105.08, p < .001$]、N語（2） [$F(2, 235) = 40.82, p < .001$]、O語・D語 [$F(2, 235) = 117.02, p < .001$] で語彙総合要因の単純主効果が有意であった。多重比較の結果、N語（1）、N語（2）、O語・D語のいずれも、下位群と中位群、下位群と上位群、中位群と上位群の全ての群間で有意であった。すなわち、どの漢字語テストでも、上位群 $>$ 中位群 $>$ 下位群の順で得点が高いということである。なお、O語・D語については、O語とD語のそれぞれの百分率得点を求めたところ、O語71.39点、D語73.95点で、D語の方がやや高かったが、統計的に有意な差でなかった [$F(1, 235) = 3.249, n.s.$]。

一方、漢字語要因の単純主効果は、下位群 [$F(2, 470) = 16.69, p < .001$] と、上位群 [$F(2, 470) = 11.87, p < .001$] では、有意であった。しかし、中位群は有意でなかった [$F(2, 470) = 2.84, n.s.$]。多重比較の結果、下位群については、N語（1）とN語（2）、N語（1）とO語・D語、N語（2）とO語・D語、の全てで有意であった。一方、上位群については、N語（1）とN語（2）の間、また、N語（2）とO語・D語の間で有意であったが、N語（1）とO語・D語では有意でなかった。以上を整理すると、下位群は、N語（2） $>$ N語（1） $>$ O語・D語の順で得点が高いが、中位群では、N語（1） \approx N語（2） \approx O語・D語であり、上位群では、O語・D語 \approx N語（1） $>$ N語（2）となる。

以上の結果から、下位群、中位群、上位群では、N語とO語・D語の習得に異なる傾向があると考えられる。まず、下位群では、N語の方がO語・D語より得点が高いことから、N語の方がO語・D語より習得しやすいと

考えられる。日本語の全般的な語彙知識が不足している段階では、形態的になじみのないN語は、学習しなければならない語として注意が配分されるため、習得が進むからではないかと考える。一方、中位群では、N語とO語・D語の得点に差がない。日本語としての語彙学習がある程度進んでくると、漢語を日本語として捉え直し、学ぶようになるため、N語もO語・D語も、同程度の習得状況になるのではないかと考える。他方、上位群では、下位群で最も得点の低かったO語・D語が、最も得点が高い。このことから、O語やD語の日本語独自義は、総合的な語彙知識に比例して順調に習得すると考えられる。ただし、上位群は、N語(2)が最も低く、下位群との得点差が小さい。N語(2)は、誤答選択肢に正答の中国語相当語である同形語が含まれており、出題語のN語の知識の有無だけでなく、同形語の中国語独自義が日本語では使われないということを理解しているか否かも間接的に測っている。よって、もし、N語(2)の得点が低かった理由が、中国語相当語の誤答選択肢が正答よりも選ばれていたことによるものだとすれば、背景に中国語独自義の過剰な転移があると考えることができる。

5.3 選択肢の選択率

そこで、N語テスト(2)において、調査対象者がどの選択肢をどの程度選んでいたのかを検討するために、誤答選択肢の選択率について分析する。

まず、3種類のテストの選択肢の選択率を集計すると(表4)、N語テスト(2)では、中国語適合の選択肢(同形語)がよく選ばれていることが分かる。全ての群で高い選択率で、上位群でも20%程度である。

表4 各テストの選択肢選択率

対象者	N語テスト(1)				N語テスト(2)				O語・D語テスト			
	正答	中国語関連	文脈関連	統語関連	正答	中国語適合	文脈関連	統語関連	正答	中国語関連	文脈関連	統語関連
上位群	78.68	11.59	8.34	1.39	79.49	19.47	0.46	0.58	82.62	7.07	7.53	2.78
中位群	74.99	11.96	10.86	2.19	73.92	23.71	1.64	0.73	77.77	8.28	9.75	4.20
下位群	63.27	16.25	16.15	4.33	64.15	25.14	8.03	2.68	56.42	17.53	18.01	8.04
平均	72.44	13.13	11.80	2.63	72.40	23.10	3.23	1.27	72.67	10.71	11.64	4.98

注: 単位は%

例えば、「脱退」という出題語の場合、「国連を()したら、国際的に

第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察

孤立してしまうのではないか」という設問文を作成し、中国語適合の誤答選択肢として、「脱退」の中国語相当語で同形語の「退出」を選定した。その他の誤答選択肢には、「除外」、「外観」を出題した。その結果、上位群でも正答より、「退出」の方が選択率が高く、正答を大幅に上回った(表5)。中国語の『退出』には<組織から脱ける、出場を取りやめる>という意味もあり、これが文意に合うため、「退出」が選ばれやすかったのだろう。

表5 各選択肢の選択率(「脱退」)

語彙総合	脱退(正答)	退出(同形)	除外	外観
上位群	32.05	65.38	1.28	1.28
中位群	32.22	63.33	3.33	1.11
下位群	22.73	56.06	12.12	9.09
平均	29.49	61.97	5.13	3.42

注: 単位は%

また、中国語相当語で同形語の「退出」の選択率がこれほどまでに高かったのは、使用される意味や場面の限定性、中国語相当語の使用範囲等の複数の要因も関わっている可能性があると考えられる。日本語の「脱退」は、多くが「国連」、「組合」、「団体」、「機関」等と共に、使用される文脈が限定的である。試みに、書き言葉均衡コーパスの少納言で検索してみると、出典のジャンルは白書、社会科学、法律と分野に偏りがあった。当該分野になじみがなければ、あまり見聞きすることがないと考えられる。一方、同形語の「退出」は、文学、歴史、言語、社会科学、自然科学と多様なジャンルに出現しており、汎用的に使われている。また、中国語の『退出』には、<立ち去る>、<組織から脱ける>という意味に加え、<コンピュータの画面からログアウトする>という意味もあり、中国人学習者にとって母語でも日常的に良く目にする、なじみのある語だと言って良いだろう。張(2011)では、中国語で基本語彙として使われる語は、日本語に転移しやすいことが示唆されており、この結果も張(2011)の論考に符号すると言えよう。

この他にも、調査対象者の40~50%程度が中国語適合の誤答選択肢を選んだ出題語が複数あった。「配分」という出題語(「時間の()が悪くて、最後まで問題が解けなかった」)では、中国語適合の「支配」の選択率

が52%、「丁寧」という出題語（「包帯を（ ）に取り替えてください」）では、中国語適合の「手軽」の選択率が42%、「油断」（「ちょっとした（ ）から事故を起こしてしまった」）では、「失神」の選択率が41%であった。このように、中国人学習者の場合、中国語独自義を日本語に当てはめてしまい、また、それが誤りであるということに気づきにくい語も少なからずある。これは、N語や同形語の日本語独自義は肯定証拠として繰り返しインプットがあるが、同形語の中国語独自義が日本語では用いられないというのは間接的な否定証拠で、学習者は理解しにくいからではないかと考える。一般的な語彙の学習や指導では、既知語数を増やすこと、つまり、日本語にはどのような語が存在し、その語はどんな意味であるか、ということに焦点が当てられることが多い。しかし、中国人学習者にとって目新しくない同形語に注目して、「この語はどんな意味でないか」ということは授業の中で取り上げられることが少ないからではないかと考える。

6 おわりに

本研究では、調査対象者の中国人学習者を、総合的な語彙知識に基づいて、上位群、中位群、下位群に弁別し、(1) N語の習得、(2) 同形語（O語・D語）の日本語独自義の習得、(3) 同形語（O語・D語）の中国語独自義の日本語への転移、について検討した。その結果、(1) N語の習得は、総合的な語彙知識が増えるにつれて、進んでいく、(2) 同形語（O語・D語）の日本語独自義の知識は、総合的な語彙知識が増えるにつれて、増えていく、(3) 同形語（O語・D語）の中国語独自義は日本語に転移しやすく、その誤りは語彙知識が豊富な学習者でも気づきにくい傾向がある、ということが示された。先行研究は、テスト形式がそれぞれ異なっており、比較検討することが難しかった。本研究の結果は、加藤（2005）を支持するものとなったが、誤答選択肢の中に中国語独自義を持つ同形語を組み込むことで、一般的なテスト形式である四肢選択式のテストに整えた上で、中国語独自義の転移の諸相について観察することができたという点で意義があると考えられる。

しかし、本研究には以下の課題が残った。まず、今回のテストでは、同形語の日本語独自義を測るために、O語とD語を混ぜたが、それぞれについ

て比較検討が必要である。中国語独自義や日本語独自義の中には、日本語と中国語とで、とれる共起語の違いが意味の違いに反映しているものもあった。よって、今後は、共起語の相違についても分析を行った上で、中国語の意味が特に日本語に転移しやすいのはどのような場合か、考察したい。また、N語の中には、「既婚」のように、単漢字の意味の組み合わせから全体の意味が推測しやすい語と、「派手」のように推測しにくい語とがある。意味の透明性や推測可能性の高い語であれば、誤答選択肢に同形語が含まれていても、正答率が高くなる可能性もある。この点についても、今後精査していきたい。さらに、張（2011）では、日本語では使用頻度が低い中国語では高頻度である同形語の場合は、より転移しやすいという重要な示唆がされている。また、本研究では、語形に基づいて使用頻度や親密度などの語彙特性の統制を行ったが、これらの語彙特性は意味によって異なる可能性もある。今後は、両言語における、さらに、意味における、使用頻度や親密度の違いを統制し、中国語の転移との関係を検討する必要がある。

これらの課題を踏まえ、今後はより綿密な調査計画を立て、中国人学習者の日本語の語彙習得に及ぼす中国語の影響について考えていきたい。

参考文献

- 天野成昭・近藤公久（2003）『日本語の語彙特性 CD-ROM 版』三省堂。
安龍洙（2000）「日本語学習者の漢語の意味の習得における母語の影響について－韓国語学習者と中国語学習者を比較して－」『第二言語としての日本語の習得研究』3, pp.5-17。
王永全・小玉新次郎・許昌福（2007）『日中同形異義語辞典』東方書店。
加藤稔人（2005）「中国語母語話者による日本語の漢語習得－他言語話者との習得過程の違い－」『日本語教育』125, pp.96-105。
張麟声（2011）「作文語彙に見られる母語の転移－中国語話者による漢語語彙の転移を中心に－」『日本語教育』140, pp.59-69。
文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局。
陳毓敏（2003）「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について－同義語・類義語・異義語・欠落語の4タイプからの検討－」『日本語教育

学会秋季大会予稿集』 pp.174-179.
西尾寅弥 (2002) 「語種」北原保雄 (監) 『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』
朝倉書店, pp.79-109.
宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2011) 「日本語語彙テストの開発と信頼性
- 中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島
経済大学研究論集』 34 (1), pp.1-18.

中国語話者による中日同形漢語語彙の習得を 考えるための対照研究

張 麟声 (大阪府立大学)

要 旨

本稿では、産出における母語転移の可能性を考えるという立場から、文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』、張麟声 (2007) 『中国語話者のための日本語教育研究入門』、及び張麟声 (2009) 「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に」を検討し、その有益な部分を吸収することで、中日同形漢語語彙を、(1)同形同品同義、(2)同形同品類義、(3)同形同品異義、(4)同形異品類義、(5)同形異品異義の5類型に分けた。

次に、国際交流基金・財団法人日本国際教育協会編 (1994) 『日本語能力試験出題基準』の4級語彙に含まれる82語をその5類型に振り分ける作業を行い、分類の適切さをサンプルで示すことを行った。今後は、日本語教育語彙としてふさわしい語を特定して、上述の5類型に割り当て、各語ごとに中間言語コーパスでの観察や検証調査を行うことを通して、その正の転移・負の転移の有無を実証していくことが課題である。

キーワード：同品、異品、同義、類義、異義

1 はじめに

語彙習得において、学習者の母語と目標言語の語彙における同族語が大きな役目を果たすことについて論じるに当たって、Terence Odlin (1989) は、次のように、今から百年前のSweet (1899)¹を引用している。この引用を読むにつけ、同族語の役割を百年も前の先達がすでに理解していることに、興奮と尊敬の念を抱かざるを得ない。さて、以下はそこからの引用である。

¹ 訳は丹下省吾訳 (1995) による。以下の Terence Odlin (1989) に対する引用も同様。